〔青木美智男先生追悼〕

専修大学史と編集主幹・青木美智男先生

高木　侃
（専修大学史編集副主幹）

一、はじめに

専修大学史編集主幹・青木美智男先生が調査で赴いた金沢市で急逝された。日本史学界にとって、多くの業績を残されたが、とりわけ未開拓な近世日本文化史研究を切り拓いた研究者を失ったことは惜しまれてならない。学界のみならず、本学の大学史の発展にとっても、その牽引車としての役割を担ってくれた先生を欠くことは計り知れない損失といえよう。

ここでは青木先生の急逝を悼むとともに、本学大学史での青木先生の足跡をたどり、執拗と思えるほどの、大学への提言や貢献が偉大だったことを検証したい。筆者は一三〇年史の初めからかかわり、二〇一二年五月に青木先生を補佐する大学史編集副主幹に採用されたので、専修大学史編纂事業アドバイザー部会の委員を代表するかたちで、筆を執らせていただいた。

青木先生が一三〇年史編集主幹に就任されたのは、二〇〇七年のことであった。大学史での先生のなされた仕事を大きく分けると四つに区分できる。すなわち、一つは、一三〇年史としての『専修大学の歴史』刊行である。大学のアイデンティティや建学の精神のよって立つところを明らかにするものであった。二つは、創立者展示会・シンポジウムの開催で、それは社会や市民に向けた、大学からの「知の発信」であった。三つは、自校史授業の展開で、学生たちに創立者たちの想いを理解させるとともに、自尊意識の涵養に努めた。要は専修大学で学ぶことの意義を示すことであった。四つは、大学史に関する聞き取りと資料調査で、今後の大学史のあり様を決定づけ、とくに未来に向けて地道に不断の努力を続けることであった。これらの多くは青木先生の発案であり、その熱意によって継続されてきたといってよい。ここでは紙幅の関係で出版・刊行事業を中心に述べる。

二、一三〇年史としての『専修大学の歴史』刊行

本学は、一九八一年に上下二巻の『専修大学百年史』を刊行した。そのときに収集・整理された膨大な資料は本学の宝物といえよう。それから五年刻みにいわゆる「年史」を刊行してきたのも、そ

の際に蓄積された資料のおかげといえる。とはいえ、五年ごとの「年史」は写真中心の図録の態をなし、大学史として、体裁・内容ともに満足のいくものとはいえない側面があった。そのため、一三〇年史刊行を前に見直しが必要との理事長・学長の意向をうけて、青木先生が一三〇年史編集主幹に就任し、実質的に新たな大学史構想がスタートした。青木先生はこれまでの年史に調査・検討を加えて、一三〇年史の具体的内容を答申した。二〇〇七年六月のことであった。

青木先生はそれまでの「年史」（主に『専修大学　125年』）の問題点を析出され、五年刻みという長いようで短い期間しかない状況のなかで、大学史資料課が収集に努めてきた新資料が利用しきれず、外部に編集をゆだねざるを得ない結果、大学側の要望や資料の蓄積が反映されない方向で編集されたものになり、「年史」を誰に読んでもらい、どう活用するかという基本的姿勢が欠如し、ややマンネリ化したものとなったと指摘された。

全国の大学の中では五年刻みで年史を刊行している大学は、専修大学だけであり、それゆえに内容が広報的性格を持ちながらも、新資料を活用し、さらに豊かな専修大学史を描き、五年刻みで刊行しているという他大学にはない特性と蓄積を十全に活かすことの必要性を実感された。

このような指摘と実感から、青木先生は、これを大学史資料課だけで編集した結果とみる。その上で、まず大学史は大学当局、教職員・学生、卒業生全体、そして社会への目配りが必要であるとの観点から、これまでの年史編纂の検討をなされた。そこで気づかれたのが、これまで社会に巣立って活躍する卒業生こそが、大学の研究・教育効果の具体的表現であるという認識と卒業生の動向についての記述の必要性であった。

卒業生への視点の欠如から、専修大学といえば、「就職の専修」と世間でいわれるにもかかわらず、年史にはその説明と記述がない。そこで卒業生への働きかけをなすとともに、あらためて大学当局、教職員・学生、卒業生が一体となった大学史を目指すべきとの結論にいたる。とはいえ、一三〇年史刊行まで、わずかな期間しかない。

そこで編集を開始するにあたって、大学当局に次のような緊急な要望をお願いした。その内容は、まず、大学史資料課が編集母体となり、集積した資料を駆使して、新鮮な感覚を覚えるような内容に努めるとともに、執筆をはじめ、編集全体にかかわることであった。しかし、大学史資料課のみの事業とせず、教育史・近現代史などの専任教員の助言を入れ、それを活かす体制づくりを早急になすことである（これが後のアドバイザー委員会となる）。

ついで、一三〇年史を大学教育の中で具体的に生かせるよう、総合講座に「専修大学の過去と現在、未来 - 日本の大学史と専修大学」を開設し、そのテキストとして活用できるようにする。編纂を始める前から、自校史授業の構想を持っていたことの慧眼に感服す

るばかりである（実際、自校史授業を展開することになる）。

さらに、卒業生へ働きかけ、大学生活を含めた資料の提供を呼びかけ、新資料の発掘に勤め、よりビジュアルで新鮮な誌面を構成できるようにする（聞き取りと資料調査へと結実する）。

その上で、大学史資料課の資料収集体制が不備、かつ不便であるため、資料収集とその整理、活用のための目録作成などのほか、卒業生からの資料提供に対応できるよう、専門的知識と研究能力を持つ人材を配置するとともに、人員の増員も考える必要がある。

創立者たちについては、その出生から留学までは、ほとんどが伝聞に近く、相馬永胤の「懐旧記」はかなり詳しいものの、後日談でしかない。幕末から近代にかけて創立者全員に関する調査を行い、その志を立てた時代の全貌へ迫るため調査を行う必要もある。

これらの要望を携え、日高理事長・学長（二〇〇七年当時）、富山専務理事と面談し、この方向で今後進めることの了承と同時に、理事長・学長は青木先生に、正式に一三〇年史編集を依頼され、編集とそれにかかわる事業に全責任を持つことを命じられたのである。

編集方針を列挙すれば、次のようなことである。

① 他大学にはない、五年ごとに刊行する年史の意義を理解し、広報性を生かしつつ、年史を読むことによって専修大学で学ぶ誇りを自覚させる編集を目指す。

② 既刊の年史までの内容をベースにしつつ、新しい観点を加えて内容豊かなものにする。そのために、既刊の年史に欠けた記述を新たに書き加えることとし、さらに大学史資料課が、この間収集した新たな資料に基づいて、これまでの記述を見直し、また新たな記述を書き加える。

③ 大学史学習を大学教育の一環に組み入れることを前提に、教材的性格を加味した編集を試みる。

④ この事業を支えるため、専門研究家集団の意見を反映させるアドバイザー委員会を常置し、そこでの意見に基づいて事業方針と具体的作業を行う。

その上で、一三〇年史は二〇〇九年九月までに刊行するというものであった。

前述した通り、卒業生こそ大学の研究・教育の成果を社会に向けて具体的に示す姿であることを十分認識し、この点を一三〇年史編集の中核に据えること、二つは、伝聞的資料に基づいている四人の創立者の出自に関して、新たな調査を行い、できるだけ正確なものに書き改めること、三つは、この間収集した新資料を活用して記述全体を充実させることであった。

上記の重点的記述の方針に基づいて、具体的な作業としては、卒業生に資料の提供を呼びかけることを第一に行うとともに、ここまで収集した資料、これから収集する資料を十全に活用できるようにするため、資料収集・整理・保存の体制を充実させることであった。

そこで、日本近代・現代史研究を専門とする専任教員によるアドバイザー委員会を常置して、編集方針、編集作業などに意見をいただき作業に反映させる。その上で、資料課員はそれぞれの作業の進行状況や問題点を共有するため、月一回の情報交換の場を設け、一ヶ月間の作業の内容を報告しあうこととなった。

青木先生の強力な指導の下で、第一回編纂アドバイザー部会が開催されたのは二〇〇七年一〇月二日であった。青木編集主幹、大谷正法学部教授（当時）、新井勝紘文学部教授、菅原光法学部講師（当時）、川村晃正商学部教授、永江雅和経済学部教授、矢野建一文学部教授と筆者・髙木が委員であった。とりわけ専門的知識の豊富な職員の増員が求められ、一ヶ月も経たずに決定した。これで卒業生への聞き取りや資料調査の準備も整い、後掲の「活動一覧」にみられる通りの作業が進捗したのである。第一回部会では大学史資料課の業務について、資料の整理・保存からその収集や公開を積極的に行い、既存の所蔵資料についても、整理・保存を工夫する必要性が指摘された。

さらに、専修大学一三〇年史は二〇〇九年九月刊行とし（アドバイザー部会発足後、二年という期間しかなかった）、「青木主幹が執筆を行う」と宣言され、全編一人でも書くという覚悟を示されている。その内容については、創立者の出自など新たな調査を行い、できるだけ正確なものに書き改める。かつ授業のテキストとして使用できるようなものにするとされ、すでに自校史授業へ展開が予定されている。

原稿の進捗とあわせて、出版社の選定がなされることになった。大学当局は、市販することを念頭においていたので、当然新聞広告もなされ、一般社会に広く知られ、多くの卒業生や読者を得ることを望まれた。出版の期限が限定されていたので、悠長に構えるわけにはいかなかった。しかも本の題名は『専修大学の歴史』であることが望ましいとされた。A新聞出版とH社とS学館が候補に挙がった。Aでは、タイトルと著者名に問題が出た。かりに「青木美智男編著」としても他の選書との整合性で疑問が投げかけられる点、またタイトルも『専修大学の歴史』が難しいのであれば、専修大学の歴史をサブタイトル、たとえば『大学教育の歩み‐専修大学の歴史‐』などの案も浮上する。S学館では、『専修大学の歴史』という書名では出版不可であった。結局のところ、大学の意向に全面的に沿った対応をみせたのは平凡社で、書名も『専修大学の歴史』と、大学名を出すこと、著者・編者についても一切出版社側の指定はしないということで、落着をみた。

あとは原稿である。記憶をたどると、必ずしも青木先生や事務局からきつい督促があったということではなく、しかし、最終的な原稿締め切り前の会合で、青木先生から「おおよそ後二週間です」といわれたときには、とてもむりとの実感だったが、各自が何とかしなければとの想いから、なんとか仕上げてしまったという感をぬぐえない。できそうもないから、何とかしようと、さらに思わずでき

てしまったという感じであったと述懐される執筆者が少なからずいる。筆者もその一人であるが、青木先生の依頼に、お応えしようとの思いが好結果をもたらしたのである。専修大学の歴史編集委員会編『専修大学の歴史』口絵八頁、総頁二八七頁の著書が、二〇〇九年九月一六日、専修大学創立からちょうど一三〇年目のその日に出版されたのである。また一〇月三〇日の大学記念日には、ホテルニューオータニにおいて記念式典と祝賀会も開催され、関係者・卒業生が招待され、学徒出陣式で専修大学校旗旗手を務めた川島東氏は祝辞を述べられた。

なお、出版にいたる事情などは『紀要』三号の「《座談会》専修大学創立一三〇年記念事業を振り返って‐専修大学史研究の回顧と展望‐」に詳しい。その中に「『専修大学の歴史』の執筆にあたって」の項目があるので、そちらをご覧いただきたい。

筆者は学生や育友会の父母等に一番強調して話すのは、校歌二番の「世に魁けし　我等が大学」の意味するところであり、一つは、法律学を邦語（日本語）で最初に講義したこと、二つは、経済学や財政学について初めて系統的に授業をなしたのは、専修大学だったということである。その日本語で法学教育を始めたという意味は、創立者たちが留学中のアメリカで法律のなんたるかを、完全に自家薬籠中のものにした上でなければできないということを意味する。また筆者担当の日本近代法史の授業では、半期の半分を創立者たちのことにあてている。それで教材を持っていない者が多いため、『専修大学の歴史』の中から必要なところをコピーして渡しているが、これが意外にも、学年末試験のころにはかなりの受講者が教材として『専修大学の歴史』を所持している効果をもたらした。それぞれが創意工夫をするということである。

三、『専修大学松戸高等学校50年のあゆみ』について

青木先生は『専修大学の歴史』執筆中の最中、専修大学松戸高等学校の理事長である富山尚徳さんから『専修大学松戸高等学校50年のあゆみ』の刊行を計画しているので、その協力方を申し込まれた。「そのとき富山さんが、高校の先生方を指導してくれればいいんですよ、と気軽に言われたので、ああそうですか、とあっさり引き受けたのが運の尽きだった」と、その著書『専修大学松戸高等学校50年のあゆみ』「おわりに」に記している。ただ専修大学大学史資料課の職員石綿豊大さんに助けていただくという条件で引き受けたともある。それから「専松」通いが始まったという。ここでも専修大学一三〇年史での構想と同様に、これまで刊行した『記念誌』のような式辞や祝辞、そして回顧談、関係記録が中心の記念誌的な本にしないで、五〇年の歩みを追える内容の豊かなものにしてはどうかと提案する。結局、生徒中心、授業を優先とする先生方の多忙さを見るに見かねて、青木先生が全部執筆し、それを先生方が読んで手を入れるなり、赤字で真っ赤にするなり訂正していただくことで、編集方針が落ち着くことになった。でき上がった『専修大学松

戸高等学校50年のあゆみ』を筆者にくださり、よく読んでくれと添えられた言葉に、「どうだ、短期間によくまとめたろう」との安堵感と、言外に誇らしく自慢顔の様子が見え隠れしていたことを鮮明に思い出す。これは青木先生にしかできない一三〇年史の派生的な成果であり、業績といえよう。

四、『専修大学史資料集』発刊、創立者企画展・シンポジウム、自校史授業など

青木先生は神奈川県史をはじめ、各地の自治体史の編纂に従事された。そこでは通史編と資料編を別に編纂するのが常態である。一三〇年史の編纂過程でも『専修大学の歴史』とともに『専修大学史資料集』の刊行を意図されていた。第三回アドバイザー部会で、一五〇年に向けた「資料集」刊行が青木先生から原案が提示され、了承されている。一五〇年に向けて二年に一冊の割で全一〇巻が刊行される予定で、第一回配布本『専修大学史資料集　第三巻　五大法律学校の時代』は筆者が監修して昨年一〇月三〇日に刊行の運びとなった。ここまでが青木先生のなされた出版・刊行事業であるが、まだほかにもなされたことは数多い。

創立者の地元の施設の協力を得て行われた企画展は、まず桑名市博物館を会場にして「駒井重格の軌跡 - 専修大学の創立者、一橋の名校長」。会期は平成二一年一二月一二日から翌二二年一月二四日であった。青木先生が大学院で指導した瀬戸口・石綿両君の献身的助力を得て、一橋大学をはじめ、山形・東京・岡山各地からの資料借入、運搬、搬入、展示がなされ、国立大学・地元施設との共催でなしえたものであった。

翌平成二三年一一月二二日から平成二四年一月九日には、鹿児島県歴史資料センター黎明館・専修大学合同企画展「日本の財政学を築いた薩摩藩士 - 専修大学創立者・田尻稲次郎の生涯 -」の開催にともなう記念講演会とシンポジウムが黎明館で行われた。このたびもまた会計検査院・国会図書館・東大図書館、御子孫宅などからの資料借入、運搬、搬入、展示などは瀬戸口・石綿両君に負うところが大であった。もちろん最初の交渉には青木先生の学識とキャリアが相手の納得をうるのではあるが。この間に平成二三年三月一一日、東日本大震災が発生した。本学でも生田校舎三号館、神田校舎五号館など被災したが、直接的な被害が甚大だったのは石巻専修大学であった。この震災被害の中で、多くの国民の心をつなぎ、希望と安らぎをもたらし、もっとも多く歌われたのが唱歌「故郷」である。その作詞者・高野辰之は、専修大学校歌の作詞者でもある。平成二四年一二月一日から同月一六日まで仙台市東京エレクトロンホール宮城を会場に石巻市・石巻専修大学・専修大学共同企画展「唱歌斉唱 - 『故郷』の作詞者・高野辰之の生涯」を開催した。青木先生は二〇代半ばを仙台・東北大学大学院文学研究科に在籍し、青春を謳歌された地で、その記念講演もなさった。今回も資料は長野県の「高野辰之記念館」および「おぼろ月夜の館」からの借用・

運搬・搬入・展示であり、日夜故郷の復興に立ち上がっている皆様への励ましの一助ともなればとの願いを込めた企画展と講演会・シンポジウムであった。

大学史研究はたんに一大学の歴史としてとらえるのみならず、広く日本の近現代史研究の重要なテーマである。その意味では、一私立大学が収蔵している大学関係資料は一大学に埋蔵させておく時代ではない。その観点から、専修大学・中央大学・日本大学・明治大学共催展「近代日本の幕開けと私立法律学校‐神田学生街と法典論争‐」を平成二六年一月二四日から二月二八日まで、明治大学博物館特別展示室で開催した。この年度に開催した全国大学史資料協議会の全国大会ではこの展示の意義を含めた基調講演もなさるはずであった。こうみて来ると、企画の発想に始まり、すべて先生の八面六臂のご活躍あってのことと感嘆あるのみである。

青木先生が編集主幹に就任された当初から自校史授業は意図されていたといってよい。青木先生は『専修大学史紀要』創刊号に「いま大学史を研究し学び合う意義について―専修大学史の編集から考える―」との一文を寄せている。翌年度から一週一コマ二単位で、テーマは「専修大学史の歴史・日本近現代史のなかの専修大学」であった。その「目的・内容」として、つぎのことを掲げた。

学術や教育、学校に目を向けた歴史研究は近年とみに注目されている。なかでも従来あまり省みられることのなかった大学の歴史については、日本近現代の社会や経済、また地域の中で大学はどのような役割を果たしてきたのかという視点から捉え直そうという動きも見られ、従来の教育史などの狭い枠を乗り越えて発展している。この講義は、そのような新たな「知」の歴史研究の中に専修大学の歴史を位置づけようとする試みである。

しかし、私立大学の多くは、時には政府の政策に翻弄されつつ、長く苦難の道をたどらざるを得ず、専修大学もその例外ではなかった。このような専修大学の輝かしく、そして苦難に満ちた歴史を日本近現代史のなかに位置づけながら学問的に分析・評価すること、そして経営者と教師中心の大学史だけではなく、そこに学んだ学生と社会で活躍する卒業生たちにも視点を当てて分析することが、この授業の目指すところである。

※当時、授業責任者であった大谷正法学部教授が執筆したシラバスからの抜粋

ここでも卒業生に目を向けている。

五、むすびにかえて‐青木先生と筆者

むすびにあたって、やや長くなるが、私事にわたることをお許しいただきたい。筆者にとって青木先生は先生と呼ぶより青木さんと呼ぶ方がふさわしい人柄でしたので、ここではさん付けで呼ぶこととしたい。筆者はずいぶん青木さんに可愛がっていただいた。筆者

が本学法学部に就職が決まったとき、日本法制史担当の前任者・鎌田浩教授に「ずいぶん面白いのを採りましたね」と言われたことを、鎌田教授からお聞きした。どのように、どこが面白いと思われたのか、いずれお尋ねしようと思っていたが、聞きそびれ残念ながら、もうその機会はない。

振り返って、後になって考えてみると青木さんとの接点は、いろいろの局面で現れていた。まず、青木さんの故郷、棚倉では奥野彦六（元東弁会長・創価大学教授）家とのつきあい、二男の善彦（弁護士・元整理回収機構社長）氏とは小・中の同級生で、彦六氏の著作の原稿整理、校正をすべて青木さんがなされた。筆者はある先輩の紹介で創価大学非常勤講師を務め、日本法制史を担当した。そのご縁で彦六先生の最後の著書『徳川幕府と中国法』（創文社、一九七九年）は筆者が青木さんにかわって原稿整理と校正すべてを行った。石井良助先生（文化勲章受章者・元専修大学法学部教授）の強い要請で、創文社は出版を急ぎ、彦六先生の亡くなる一週間ほど前に完成したのである。青木さんは自宅を訪ねると朝から日本酒だったそうだが、筆者は八王子の講義の後だから夕刻から奥様の手作りの肴での一杯だった。共通の体験をお互い話し合ったのは、本学に勤務後であった。

筆者が『縁切寺東慶寺史料』を平凡社から出版したのは、平成九年であったが、編集作業には「神奈川県史資料所在目録 - 鎌倉市（その2）-」と、保存されていた文書コピーと写真がずいぶん役に立った。これもまた精力的に資料調査した青木さんの仕事だったそうで、その苦労話とともにここでも青木さんの恩恵を被っているわけである。

青木さんの前任校は、日本福祉大学であった。そこに一橋大学を退官された永原慶二先生を迎えられたのは青木さんで、永原先生は当時「比較家族史学会」初代会長であった関係で、日本福祉大学で、昭和六二年秋、研究大会「〈老〉の比較家族史」を実質的には青木さんの尽力で開催することができた。現在、筆者が九代目会長を務めていることを考えると、青木さんとの「深厚の宿縁」を感ずる。

昨年度、エクステンションセンターからの依頼で、横須賀市の市民大学講座を青木さんと半分ずつ担当し、きちんとしたレジュメを用意することを教えられた。また研究者としても青木さんに背中を押していただいた。青木さんは、依頼された講演と原稿は断らない主義で（学会の雑誌編集をなされ、原稿が滞ると自分で書かれた経験からだそうである）、吉川弘文館で「読みなおす日本史シリーズ」の一冊として、石井良助先生の『江戸の刑罰』（中公新書・絶版）を復刊するにあたって、筆者がその解説を依頼された。刑法の専門家でないことから、いったんは断った。そのとき、原稿料の一〇倍位かけて資料や調査をしてでも書くものであると忠告され、最晩年の門下生（思えば、石井先生に正式に紹介の労をとって下さったのが彦六先生であった）として書くことを再び慫慂されて引き受け

た。専大図書館や歌舞伎好きだったことから松竹の大谷図書館などに通い、なんとか「『江戸の刑罰』を読む」と題する解説をものにすることができた。学界や本学大学史にとってなにより青木さんを失ったのは惜しまれる。筆者にとってもまだいろいろご教示をいただきたい先輩で、残念でならないが、その遺志を継ぎ、微力ながら本学大学史の発展に寄与することをお誓い申し上げたい。

お酒が好きだった青木さんは、ふらっと入るというより、決まった店があり、大学史資料課で五時をまわれば、ここ一両年は決まって大学近所の蕎麦屋であった。原稿があるから今日はここまでということもなく、天上で毎晩おいしい酒を嗜まれて愉快に過ごされてください。合掌。

表　2007年4月以降の主な大学史資料課の活動

年	月　日	業務内容	活動内容	調査先・展示会場
平成19年	10月2日	その他	第1回専修大学130年史編纂アドバイザー部会	神田校舎
平成20年	1月16日～18日	資料調査	相馬永胤関係	彦根城博物館、彦根市立図書館
	3月5日～7日	資料調査	駒井重格関係	鶴岡市郷土資料館、酒田市立図書館、寒河江市立図書館ほか駒井関係史跡
	4月17日	講義	自校史授業の開始	生田校舎
	5月8日	講義	自校史授業「専修大学の創立と発展」（青木）	生田校舎
	5月27日	資料調査	川島記念室収蔵資料の整理開始	専修大学松戸高校
	6月7日	講座	専修大学人文科学研究所創設40周年記念公開講座「産業観光の旅の流行 - 物つくりの現場が名所となる日 - 」（青木）	神田校舎
	6月26日	講義	自校史授業「高度経済成長と専修大学」（青木）	生田校舎
	7月3日～5日	資料調査	駒井重格関係	三重県史編さんグループ、三重県立図書館、桑名市博物館、桑名市立図書館ほか駒井関係史跡
	9月4日～7日	資料調査	相馬永胤・田尻稲次郎関係	きよたけ歴史館、安井息軒旧宅、鹿児島県立図書館ほか田尻関係史跡
	9月9日	その他	元森保太郎家旧蔵資料の翻刻開始	
	9月14日	資料調査	阪谷芳郎関係	渋沢史料館
	9月29日	その他	土田雪鴻家旧蔵資料の翻刻開始	
	11月17日	資料調査	目賀田種太郎関係	国立国会図書館
	12月7日	聞き取り調査	佐藤孝一（昭和18年卒）	
	12月8日	聞き取り調査	川島東（昭和19年卒）	
	12月9日	資料調査	石巻専修大学関係	石巻専修大学
平成21年	3月4日～29日	展示会	サテライトキャンパス開所記念企画展「専修大学のあゆみ、多摩区のあゆみ」	サテライトキャンパス
	3月21日	座談会	戦中・戦後の専修大学を語る（昭和20年代の卒業生6人）	神田校舎
	3月31日	刊行物	『専修大学史紀要　創刊号』	
	5月1日～4日	資料調査	駒井重格関係	桑名市博物館、岡山朝日高校、岡山県立図書館、岡山県立記録資料館
	5月28日	講義	自校史授業「近代日本法律学と専修大学」（青木）	生田校舎
	5月30日	講座	エクステンションセンター公開講座（瀬戸口）	サテライトキャンパス
	6月18日	講義	自校史授業「校歌の誕生 - 大正・昭和初期の専修大学 - 」（青木）	生田校舎
	9月16日	刊行物	『専修大学の歴史』（専修大学の歴史編集委員会委員長・青木）	
	9月16日	展示会	創立130年記念食事会における「鹿鳴館の時代」	神田校舎

年	月　日	業務内容	活動内容	調査先・展示会場
平成 21 年	9 月 16 日 ～ 11 月 22 日	展示会	創立者同時代展	神田校舎、サテライトキャンパス、生田校舎、東京芸術劇場
	10 月 6 日 ～ 8 日	資料調査	駒井重格関係	鶴岡市郷土資料館、寒河江市立図書館ほか駒井関係史跡
	10 月 9 日	講義	自校史授業「専修大学の出発」（青木）	神田校舎
	10 月 19 日	聞き取り調査	佐藤孝一（昭和 18 年卒）	
	10 月 30 日	展示会	創立 130 年記念式典における「専修大学のあゆみ」	ホテルニューオータニ
	11 月 20 日	講義	自校史授業「夜学の隆盛と専修学校」（青木）	神田校舎
	11 月 21 日	講演会	専修大学図書館特別展「二つのモダーン - 江戸文化とフランス革命 - 」記念講演会「江戸後期の人々と書物・読書」（青木）	東京芸術劇場
	12 月 12 日 ～平成 22 年 1 月 24 日	展示会	専修大学・桑名市博物館・一橋大学共同企画展「駒井重格の軌跡 - 専修大学の創立者、一橋の名校長」	桑名市博物館
平成 22 年	1 月 9 日	展示会（関連行事）	「駒井重格の軌跡」記念講演会・シンポジウム（司会：青木）	くわなメディアライヴ
	3 月 9 日	聞き取り調査	岩井宏二（専大松戸第 7 代校長）	
	3 月 15 日	聞き取り調査	稲田宏（専大松戸第 5 代校長）	
	3 月 17 日	聞き取り調査	飯野宗健（専大松戸元教員）	
	3 月 23 日 ～ 25 日	資料調査	田尻稲次郎・付属高校関係	鹿児島大学、鹿児島県歴史資料センター黎明館、専修大学玉名高校
	3 月 26 日	聞き取り調査	中薗崇（専大松戸第 4 代校長）	
	3 月 31 日	刊行物	『専修大学史紀要　第 2 号』	
	4 月 1 日	その他	専修大学 130 年史編纂アドバイザー部会を専修大学史編纂事業アドバイザー部会と改称	
	4 月 12 日	聞き取り調査	山本哲二郎（専大松戸第 6 代校長） 松本英夫（専大松戸第 8 代校長）	
	4 月 19 日 ～ 20 日	資料調査	付属高校関係	専修大学北上高校
	4 月 23 日	聞き取り調査	高田浩（専大松戸第一回生）	
	5 月 17 日	資料調査	付属高校関係	専修大学附属高校
	5 月 22 日 ～ 23 日	展示会	歴史学研究会大会記念「創立者の志と専修大学の歴史」	生田校舎
	5 月 25 日 ～ 7 月 15 日	展示会	サテライトキャンパス常設展	サテライトキャンパス
	5 月 27 日	講座	エクステンションセンター公開講座（瀬戸口）	サテライトキャンパス
	6 月 4 日	聞き取り調査	清水徳雄（専大松戸元教頭）	
	7 月 1 日	聞き取り調査	今関晴夫（昭和 19 年卒）	
	7 月 9 日	資料調査	田尻稲次郎関係	大原幽学記念館

年	月　日	業務内容	活動内容	調査先・展示会場
平成 22 年	7 月 15 日	講義	自校史授業「専修大学の現在と未来」（青木）	生田校舎
	7 月 26 日	座談会	在職時の思い出（昭和 42 年入職者 3 人）	生田校舎
	9 月 9 日	講演会	佐渡市文化講演の集い「佐渡の暮らしと江戸の暮らし～佐渡奉行川路聖謨の日記を読み解く」（青木）	佐渡島開発総合センター
	9 月 14 日	座談会	専修大学創立 130 年記念事業を振り返って - 専修大学史研究の回顧と展望 -（専修大学史編纂事業アドバイザー委員 7 人）	生田校舎
	9 月 25 日 ～ 10 月 17 日	展示会	サテライトキャンパス企画展「変わりゆく大学・学生・町なみ - 高度成長期の専修大学と多摩区 -」	サテライトキャンパス
	10 月 4 日	資料調査	田尻稲次郎関係	鹿児島大学附属図書館、鹿児島県立図書館、鹿児島県歴史資料センター黎明館
	10 月 9 日	展示会（関連行事）	「変わりゆく大学・学生・町なみ - 高度成長期の専修大学と多摩区 -」記念講演会（青木、瀬戸口）	サテライトキャンパス
	10 月 16・23・30 日、11 月 6・13・20・27 日、12 月 4・11・18 日	講座	横須賀市市民大学「江戸時代の文化について － 特に暮らしの文化を中心に －（青木）	横須賀市生涯学習センター
	10 月 30 日	刊行物	『専修大学松戸高等学校 50 年のあゆみ』（創立五十周年記念誌刊行委員・青木、執筆：青木）	
	12 月 12 日	展示会	創立 130 周年記念映画「学校をつくろう」完成披露試写会における「創立者展」	神田校舎
平成 23 年	2 月 19 日	聞き取り調査	小田千代子（相馬永胤令姪）	
	2 月 22 日	資料調査	相馬永胤関係	きよたけ歴史館、安井息軒旧宅、飫肥城歴史資料館、国際交流センター小村記念館
	3 月 31 日	刊行物	『専修大学史紀要　第 3 号』	
	4 月 4 日	その他	堀之内松十郎家旧蔵資料の整理開始	
	4 月 7 日 ～ 8 日	資料調査	川島正次郎関係	富士山中湖セミナーハウス
	5 月 7 日	講演会	映画「学校をつくろう」上映会における講演会「創立者たちの郷土への思い」（瀬戸口）	校友会三重県支部
	5 月 17 日 ～ 18 日	資料調査	田尻稲次郎・目賀田種太郎関係	同志社ほか田尻関係史跡、愛荘町立歴史文化博物館ほか目賀田関係史跡
	5 月 26 日、6 月 2 日	講座	エクステンションセンター公開講座（瀬戸口）	サテライトキャンパス
	6 月 24 日 ～ 26 日	資料調査	田尻稲次郎関係	鹿児島県立図書館ほか田尻関係史跡
	7 月 6 日 ～ 7 日	展示会	川島正次郎記念展示室の展示替え	富士山中湖セミナーハウス
	7 月 17 日	展示会	校友会北信越連合大会における「創立者の志と専修大学のあゆみ」	富山国際会議場
	7 月 20 日	資料調査	田尻稲次郎関係	会計検査院

年	月　日	業務内容	活動内容	調査先・展示会場
平成 23 年	7 月 30 日 ～ 31 日	資料調査	堀之内松十郎関係	大分県公文書館、中津市歴史民俗資料館、中津市立図書館ほか堀之内関係史跡
	8 月 9 日	聞き取り調査	徳田陽子（田尻稲次郎令曾孫）	
	10 月 19 日	講演会	ブラッシュアップ研修における「大学職員の歴史」（瀬戸口）	富士山中湖セミナーハウス
	10 月 27 日	資料調査	田尻稲次郎関係	修養団
	11 月 22 日 ～平成 24 年 1 月 9 日	展示会	黎明館・専修大学合同企画展「日本の財政学を築いた薩摩藩士 - 専修大学創立者・田尻稲次郎の生涯 - 」	鹿児島県歴史資料センター黎明館
	11 月 28 日 ～ 12 月 24 日	展示会	千代田図書館・専修大学共同企画展「都電開通 100 年記念特別展示　千代田区にも路面電車が走っていた！」	千代田図書館
	12 月 3 日	展示会（関連行事）	記念講演会「田尻稲次郎と松方正義の時代」（原口泉）	鹿児島県歴史資料センター黎明館
	12 月 10 日	展示会（関連行事）	千代田区にも路面電車が走っていた！講演会（瀬戸口）	千代田図書館
	12 月 18 日	展示会（関連行事）	シンポジウム「田尻稲次郎の生涯とその功績」（司会：青木）	鹿児島県歴史資料センター黎明館
平成 24 年	1 月 11・18・25 日、2 月 1･8･15・22・29 日、3 月 14・21 日	講座	横須賀市市民大学「江戸時代の大災害と復興の歴史から学ぶ」（青木）	横須賀市生涯学習センター
	3 月 31 日	刊行物	『専修大学史紀要　第 4 号』	
	4 月 1 日	その他	全国大学史資料協議会の幹事校に就任	
	5 月 7 日	科研費	神田四大学による研究会設置（専大、中大、日大、明大）	
	5 月 26 日	講演会	企業家クラブ総会における講演会「大学の歴史」（瀬戸口）	生田校舎
	6 月 7 日、 6 月 14 日	講座	エクステンションセンター公開講座（瀬戸口）	サテライトキャンパス
	6 月 16 日、 7 月 14 日	講座	鶴岡市民大学講座「歴史から学ぶ　私たちの今、そしてこれから」（青木）	鶴岡市中央公民館
	7 月 5 日 ～ 6 日	資料調査	高野辰之関係	高野辰之記念館、おぼろ月夜の館ほか高野関係史跡
	8 月 29 日 ～ 31 日	資料調査	高野辰之関係	高野辰之記念館、高野良之氏宅、おぼろ月夜の館ほか高野関係史跡
	12 月 1 日 ～ 12 月 16 日	展示会	石巻市・石巻専修大学・専修大学共同企画展「唱歌斉唱 -「故郷」の作詞者・高野辰之の生涯 -」	東京エレクトロンホール宮城（宮城県民会館）
	12 月 1 日	展示会（関連行事）	高野展記念演奏会・ミニ講演会（青木）	エルパーク仙台
	12 月 9 日	展示会（関連行事）	高野展記念シンポジウム（司会：青木）	東京エレクトロンホール宮城（宮城県民会館）
	12 月 15 日	展示会（関連行事）	高野展記念演奏会・ミニ講演会（瀬戸口）	石巻専修大学
平成 25 年	1 月 9・16・23・30 日、2 月 6 日	講座	横須賀市市民大学「江戸時代の女性の生き方を考える」（青木）	横須賀市生涯学習センター
	2 月 13・20・27 日、3 月 6・13 日	講座	横須賀市市民大学「江戸時代の女性の生き方を考える」（髙木）	横須賀市生涯学習センター

年	月　日	業務内容	活動内容	調査先・展示会場
平成 25 年	3 月 25 日 ～ 26 日	資料調査	専修大学北海道短期大学関係	専修大学北海道短期大学
	3 月 31 日	刊行物	『専修大学史紀要　第 5 号』	
	4 月 1 日	その他	相馬永胤文書のデジタル化開始（科学研究費助成事業）	
	4 月 11 日	聞き取り調査	布施淳子（元職員）	
	5 月 8 日 ～ 9 日	資料調査	専修大学北海道短期大学関係	専修大学北海道短期大学
	5 月 16・23・30 日	講座	エクステンションセンター公開講座（瀬戸口）	サテライトキャンパス
	5 月 17 日	聞き取り調査	井上久男（昭和 25 年卒）	
	6 月 8 日	聞き取り調査	小川久方（昭和 7 年卒の秩父重剛令息）	
	6 月 10 日	聞き取り調査	植木金矢（昭和 9 年卒の上原敏関係）	
	10 月 6 日	聞き取り調査	中村清吉（昭和 19 年卒）	
	10 月 30 日	刊行物	『専修大学史資料集　第三巻』（第一回配布本）	
	11 月 21 日	刊行物	『阪谷芳郎関係書簡集』（編集委員：青木、瀬戸口）	
平成 26 年	1 月 19 日	講演会	奥の細道むすびの地記念館　第 8 回企画展「日本鉄道黎明期のコンダクター　日本初の工学博士・松本荘一郎」における関連講座「明治初期における日本人海外留学事情～初めての国費留学生・松本荘一郎を中心に～」（瀬戸口）	奥の細道むすびの地記念館
	1 月 24 日 ～ 2 月 28 日	展示会	専修大学・中央大学・日本大学・明治大学共催展「近代日本の幕開けと私立法律学校 - 神田学生街と法典論争 -」	明治大学博物館
	3 月 31 日	刊行物	『専修大学史紀要　第 6 号』	